

「つたえること・つたわるもの」№193
マスコミ人が失った「感動する魂」、〈エディターシップ〉をとり戻せ。

健康ジャーナリスト 原山建郎

去る1月27日、10時間超に及んだフジテレビの記者会見に端を発した「中居正広問題（2023年6月に発生したX子さんとのトラブル、その後の示談成立・守秘義務を盾に説明責任を回避）」と「フジテレビの不可解な対応（2023年8月、事態を把握した港浩一社長が同社関係者であるXさんに面会したものの、社内に必要な報告と連携を行わず、ごく少数のみで情報を共有し、何事もなかったはかのようにスルーしていた）」のダブルパンチとなり、その事態を重く見たテレビCM（スポンサー）の半数以上がキャンセルという、史上最悪の展開となった。

かつてテレビ東京社員として、テレビ番組の制作に関わってきた田淵俊彦さん（現在は桜美林大学芸術文化学群ビジュアル・アーツ専修教授）は、**PRESIDENT Online**『フジテレビと共倒れ…

「スポンサー離れよりずっと深刻」いまテレビの現場で起きている「負のスパイラル」』（2025年2月2日）の中で、「ヒト」を大切にしない会社に、いい「モノ」は作れない、と指摘している。

田淵さんはさらに、「今回のフジ騒動で、私は『ヒト』が『ないがしろ』にされているように思えて仕方がない。現場で働く社員のところが離れてしまった。『フジ離れ』は制作会社や芸能事務所、取材先、他局へと広がっている。スポンサー離れよりずっと深刻だ」とも述べている。

★あの会見で誰に向かって謝罪したのか

「こんな会社の社員で情けないと思った」
「社員のことを何も考えてくれていない気がした」
「幹部は自分の保身しかないよね」
「4月に入って来る新入社員がかわいそう」

以上は、27日のフジテレビの記者会見後に、私（※田淵さん）がフジの社員や元社員に取材をした際に出た感想である。（中略）

冒頭に挙げた社員や元社員の声からわかるように、会見に「社員不在」「社員無視」という感覚を持った者が多かったことは確かである。私も中継映像を見ていて、「幹部が向いている先は、社員ではない」と感じた。（中略）

★現場と経営陣の「断絶」

アメリカの経営学者ジェイ・B・バーニー氏（※「経営資源に基づく戦略論」で知られるユタ大学経営大学院教授）は、「ヒト・モノ・カネ・情報」を経営資源として捉えている。

このうちの「ヒト・モノ・カネ」は、企業がビジネスを運営する上で必要な3要素と言われ、「ヒト」は人材、「モノ」は物資、「カネ」は資金を指す。このバランスを見ながら有効に活用することが企業の成長や競争力の向上につながるとされているのだが、私はこの「ヒト・モノ・カネ」の順番には意味があると考えている。

それは、「ヒト」があるからこそ「モノ」を生み出し「カネ」を稼ぐことができると思うからだ。

テレビの世界も同じで、「カネ」を稼ぐことを先に考えてはいけなし、「ヒト」を大切にしないで良い「モノ（＝番組）」を作ることはできない。それは私のテレビ局時代の哲学とも言えるもので、いまでも（桜美林）大学の授業で学生たちに伝えていることだ。

（PRESIDENT Online、田淵俊彦、「ヒト」を大切にしない会社に、いい「モノ」は作れない）

テレビ東京の社員として、長年、番組制作のチーフ・プロデューサー（Chief Producer）を務めた田淵さんがいう「ヒト（＝番組制作者）」とは、私が34年間在籍した出版業界でいえば、「モノ（雑誌・書籍）」をつくる「編集者（Editor）」のことである。「モノをつくる」仕事には、「製作（道具や機械などを用いて、モノをつくる）」と、「制作（クリエイティブなモノを、自分のアイディアをもとにつく

る)」とがある。

もちろん、テレビ・ラジオの番組制作者、雑誌・書籍の編集者は、一つの金型があれば大量生産も可能な「製作」ではない。その「ヒット」にしかつけないオンリーワン、それが「制作」の仕事である。

たとえば、「製作」を意味する英語の一つ目は、**Manufacture**（大規模にモノをつくる）で、同じ種類の製品を「大量生産」するイメージがある。二つ目は **Produce**（一から何かをつくり出す）で、「制作」に近いニュアンスをもつ。三つ目は **Make**（さまざまなモノをつくる）だが、**Maker**（製品の製造者）、**Film-Maker**（映画製作者）、**Make-up Artist**（美容家、ヘア&メイクアップアーティスト）などのように、「つくる」仕事を広い意味で表現する英語である。

また、「制作」を意味する英語の一つ目は、**Product**（映画や音楽などを制作する）で、**Movie Producer**（映画製作者）、**Music Producer**（音楽制作者）ように使われる。二つ目は **Create**（芸術や文学などを創造する、創作する）で、**Creator**（自分の技術・スキルを用いて、さまざまなアイデアをかたちに表現する人）と呼ばれる。

テレビ・ラジオの番組制作者、つまり番組「編集者」、雑誌・書籍の編集者に等しく求められるクオリティ（資質）は、「編集者魂」とも訳される〈エディターシップ（**Editor Ship**）〉である。

なぜ、「製作」と「制作」の違いをとり上げたかという、10時間超の記者会見後、社長を辞任した港浩一さんも、かつては **AD**（**Assistant Director**）から **D**（**Director**）に、そして **P**

（**Producer**）として、自ら手がけたバラエティー番組『とんねるずのみなさんのおかげでした』の現場で「制作」を経験した、番組編集者（**Editor**）だったに違いない、と考えたからである。

その港さんの記者会見を視聴したフジテレビの社員たちの目に、「社員不在」、「社員無視」と映ったのは、制作現場の「社員」に求められる〈エディターシップ（制作者魂）〉の「不在・無視」を感じたからで

はないだろうか。

今回の中居正広・フジテレビ騒動から学ぶべき、最重要テーマは、マスコミ人が失いつつある「感動する魂（**Spirits**）」、すなわち〈エディターシップ〉をとり戻すことである。

かつて、私が龍谷大学文学部「情報出版学特殊講義（2010年）」の授業でとり上げた、見城徹（幻冬舎社長）、石川武美（主婦の友社創業者）、小学館エントリーシート（2008年度新卒採用）の配布資料（一部）を紹介しながら、21世紀のマスコミに求められる〈エディターシップ（編集魂）〉について考えてみたい。

（※引用部分は青字。太字は原山。以下同じ）

★「新しく出て行くものが無謀をやらなくて、一体何が変わるだろうか」——見城徹語録

芭蕉一門の俳風をあらわす「不易流行其基一也（不易も流行も、その基は一なり）」という言葉がある。われわれは「不易」という概念を「変わらざるもの＝不変」と考えがちだが、それぞれの時代に移り変わる「流行＝変わるもの」に曝されることで、それまでの「不易」がさらに深まり、より洗練された「新しい不易」へと止揚（より高次の段階に進む）する、そして「新しい不易」から次の「流行」が生み出されるという意味である。いつの時代にも、編集者の「こころざし（**ambition**）」のなかに「新しい不易」の芽が育まれる。

老舗出版社の角川書店を1993年に飛び出して、幻冬舎（社名は作家の五木寛之さん命名）を興した名物編集者・見城徹さんもまた、「新しい不易」を創出したひとりである。

龍谷大学の授業資料に載せた「見城徹語録」の出典は、▲『編集者 魂の戦士』（NHK「課外授業ようこそ先輩」制作グループ+KTC中央出版編、『別冊 課外授業ようこそ先輩』、2001年）、▲『編集者という病い』（見城徹著、太田出版、2007年）、■幻冬舎 PLUS『オンリー・イエスタデイ』第11回チキンハート・インタビュー（見城徹、2002.11.01 公開）か

ら、それぞれ抜粋した「見城徹の名言」である

「百匹の羊、全員の平和と安全と維持を考えるのが、政治や経済、法律とか道徳の仕事。しかし、その群れから滑り落ちる一匹の羊の内面のために表現はある」

（『編集者 魂の戦士』「プロローグ」7ページ）

心が運動すると、風が起る。熱が出る。光が発生する。人はそれに引き寄せられる。

それが君の魅力だ。

君の存在感だ。

運動しない心は何も生み出さない。

運動する心と心がぶつかり合った時、傷口が広がる。

返り血を浴びる。涙も出てくる。

でも、そこからが本当の関係なんだ。

そこからが全ての始まりなんだ。

君たちの心は運動したか？

運動したらわかるはずだ。

やればできる。

編集とは感動だ。

（『編集者 魂の戦士』「編集後記」184ページ）

編集者というのは自分が感動しないと動けないんですよ。街でフッと聞こえてきた音楽や、電車に乗った時にたまたま見た車内広告。それから偶然テレビで見た俳優さんとか、なんとなく本屋で手に取った本に引きつけられて、そこに入って行ってしまう。感動する。そういうことがないと、これを編集してみようという情熱が湧いてこないじゃないですか。

感動しない限り ぼくらの仕事というのは成立しないんです。感動しないものをやることぐらいつまらないことはない。せっかく生きてんだから、感動に出会ったほうがいいじゃないです。感動に出会わない人生ほどつまらないものはなくて、感動すれば自分もまた変わるし、感動するということを自分の中で知ったとき、とても人生が豊かになると思います。

（『編集者 魂の戦士』「一日目授業後インタビュー」85ページ）

（※よい文章とは）文章がうまかったり、文章の

構成がとってもよくできていたり、そんな必要は全然ないの。まず大事なのは、自分らしいということ。他の人が真似できないものがあればいい。それが一番大事な。

二番目は、文章がいきいきしていること。その風景とか情景が目には浮かぶ。光とか匂いとか音とか熱というものが感じられる。風が感じられる。体でもって、その文章を受け止められる。ちょっと難しいことかもしれないけども、とにかくいきいきと書いてあればいい。変に説明していない方がいいと思う。

三つ目、文章に発見がある。これは、「あっ！こんな感動があったんだ」とか、「こんな悲しさがあったんだ」とか、「こんな言い方があったんだ」という、何か新しい発見があるということ。

うまく書く必要なんかぜんぜんない。いびつでも短くても下手くそでも、どうでもいいと思う。この三つがあれば文章というか書いたものというのは、すごく心に伝わってくるの。

僕はいつもこの三つを基準にして原稿を読んでいます。

（『編集者 魂の戦士』「編集って何だ？」45～46ページ）

ぼくはいつも部下に、「取り返しのつかないことになってもいい。一步も二歩も踏み込まないでなああの仕事をするよりは全然いい。返り血を浴びたり関係が悪化することはしょうがないことだから、踏み込め」と言ってる。

踏み込めないやつはだめですよ。愛さなければ踏み込めない。感動してなけりゃ踏み込めない。編集者の一番の条件は感動することと、その相手に入れ上げること。それが編集者の特権なんだもの。全く知らない、ふっとテレビに映った俳優だったり、街で聴こえてきた音楽に感じるものがあれば、その人に会って仕事ができるかもしれない特権を持つてるわけだから、それをやらなきゃ編集者になった意味はないと思う。

（『編集者という病い』第二章 SOUL OF EDITOR 160ページ）

見城 人は必ず病気になるし 生まれたからには必ず老いる。肉親だろうと友人だろうと人は裏切る…。仕事は上手く行かない。恋は成就しない。それを前提として生き始めようじゃないかというのが根本に流れているものなんです。黙々と生きて黙々と死んでいった人たちはみな、それを静かに受け入れるんです。僕にとって尊敬すべき人たちというのはそういう人たちなんです。人生の価値というのは、総理大臣だろうと田舎で黙々と生きた人だろうと、みな同じだと思うんです。最終的に人はひとりで死んでいく。それはすべての人間に対して平等じゃないですか。その時 笑って死ねるかどうか。それ以外は全部プロセスに過ぎない。自分の人生が成功か失敗か、死ぬ瞬間、自分自身が決めるわけです。その瞬間のために僕は今、戦っている。(中略)

見城 過去は引きずらないんだよねえ。自分を満たしてくれるものは今この瞬間に、リスクがあるものじゃないとダメだから。だから「薄氷は自分で薄くして踏め」という言葉にもなるし、「響蹙(ひんしゅく)は金を出してでも買え」「スムーズに進んだ仕事は疑え」「新しく出ていく者が無謀をやらなくて一体何が変わるだろうか」というコピーにも繋がるんです。

『オンリー・イエスタデイ』 第11回チキンハート・インタビュー、見城徹

★「真実を書く」、「情熱で書く」、…「祈りの心で書く」——石川武美が遺した『記者の道』

昭和43(1968)年、主婦の友社に入社した私は、同年9月、婦人雑誌『主婦の友』編集部配属された。創業社長である石川武美(1887~1961年)は、その7年前に昇天(プロテスタントの信者)されており、その訶咳に接することは叶わなかったが、新入社員に配布された『記者の道』(石川武美著、主婦の友社、1961年第2刷発行、非売品)を通じて、石川武美の烈々たる〈エディターシップ(編集者魂)〉にふれることができた。爾来、79歳を迎えたいまも「生涯一記者」をめざす私が、本コラムの原稿を書

くときの「座右の一冊」となっている。

石川武美は1887(明治20)年、大分県生まれ。17歳のとき志を立てて上京。苦闘の青春時代を経て、1916(大正5)年、31歳で現在の主婦の友社の前身である東京家政研究会を興し、翌1917(大正6)年2月に『主婦の友』を創刊。生涯「一社一誌」の信念を貫き、記録的な成績と信用をおさめた。



座右の一冊、『記者の道』

以下に紹介するのは、『記者の道』からの抜粋(青字表記)だが、いずれも「さわりの部分」である。

真実を書く

私が「真実を書け」というと、どの記者も腑に落ちぬようだ。「真実では面白くない」という。面白くとはどういうことか。小説や物語なら、面白ければいいかもしれぬ。作りばなしはそのためのものだ。小説家のかくものは、空想からわいた創作でいい。むしろ創作であるべきだ。そのほかの場合がちがう。読者は事実をもとめている。真実と思うてよむそれに、作りばなしでは、「パンをもとむるものに石をあたえた」ことになる。

(『記者の道』5ページ)

わかりよく書く

「おれは知識人だぞ」という見栄から、記者は難しい記事をかかかもしれぬ。また経験のとぼしいために、読者を自分と同等の知識人と思い、「自分にわかることは読者もわかる」、つもりでかかかもしれぬ。学校の試答案だと、みってくれるのが先生だ。教えてくれた先生だ。わからぬところは意味を補っても読んでくれる。そんな答案をかきなれた、学生あ

がりの若い記者は、先生と読者のみさかいがない。なおそのうえに駆け出しの記者は、先輩記者に力量をみせようという、至極もつともな理由もあろう。それにしても、記事の対象は編集長でもなく先輩記者でもなく、ただ「読者だけ」だ。それをわすれては見当がくるう。

(『記者の道』 30～31 ページ)

情熱で書く

記者にはいろいろな資格がいるが、どれほど完備した資格者でも、情熱に欠けては記者とはいえぬ。記者の記者たる資格はこの点だ。わが職分に情熱をもつか。わが書くものに情熱をもつか。わが情熱のたかまるあいだが「記者」のあいだだ。情熱がうせたら、たとえ名記者でも記者とはいえぬ。地位や名誉があろうとも、いさぎよく職を去ることだ。どの職業にも「老朽」はあるが、すべての老人が朽ちはせぬ。七十になっても進歩をつづける記者があり、八十になっても情熱をたぎらせる記者もある。それかと思うと、「若朽」の記者もある。精気もなければ情熱もない、干からびたような記者もある。老朽はやむをえぬが、若朽となっておしまいだ。

(『記者の道』 47 ページ)

材料豊富で書く

読者は正直だ。その鏡のような心には、記者のすべてがうつる。ありあまるほどの材料を、吟味に吟味して書いたものか、貧弱な材料を飴細工のように、ひきのばしたものか、読者がよめばすぐわかる。ながながしい記事ではあったが、読後にのこる何物もないものがある。みじかい記事の割合に、多くのことを教えてくれるものもある。書き方がうまいはずいの相違だけではない。材料が良いか悪いか、充実していたかいなかったか、これによって読みごたえがちがう。(中略) 駆け出しの記者にまざって、材料あつめに夢中になる経験者もある。この真剣さと謙虚さが、記者の筆に生命をあたえる。いつまでたっても、筆にみずみずしさがやどる。百人にひとり、千人にひとり、たまにはこういう記者がある。

(『記者の道』 59～60 ページ)

記者は革新家

時代は変わる。良くもかわるが、悪くもかわる。この変化の中にはたらくのが記者だ。立役か端役か、ともかく一役演ずる記者だ。一役演ずるというが、役者でも演出家でもなく、陰で重きをなす。脚本家の役割かもしれぬ。記者の理想なり思想なりが、時代をうごかし時代をつくりはせぬか。

(『記者の道』 74 ページ)

信頼される記者

人間の価値は信頼の価値だ。どのくらいひとに信頼されるかできまる。「あの人の言うことなら」と信頼されるのと、「あの人の言うことでは」と信じられぬとでは、大きい相違だ。(中略) 「あの雑誌に出ていたから」と一も二もなく信頼され、実行されるようにならねば、せつかくの雑誌も価値がない。発行部数の多いだけでは価値は決まらぬ。どのくらい読者に信頼され、どんなに読者に敬愛されているか、それできまる新聞雑誌の価値だ。

(『記者の道』 87～81 ページ)

祈りの心で書く

祈りの心とは真剣以上のことだ。右手にはペン、左手には煙草で、原稿用紙を灰でうずめるような記者に、祈りの心をもとむることはできぬ。精いっぱい力さえ出しきらぬものに、神の力を祈りもとむることはできぬ。人の力が出しつくさねば、祈りにこたえる神の力は加わらぬ。自分の力を出しもせず、努力の苦心をかたむけもせぬものに、祈りの力はさずけられぬ。(中略)

心の底から出たものでないと、人の心の琴線にはふれぬ。祈りの心はまざりけのない心だ。ごまかしのない心だ。へりくだった心だ。くだけた心だ。気どりのない心だ。神によるこばれる心だ。ところが神によるこばれる心は、人によるこばれる心だ。記者という記者は、自らのむところがありすぎる。読者にむかって教える側に立つ。自ら「もの知り」と任ずる。謙虚な気持ちでかいているかいないか。読者にはそれをかぎわける感覚がある。鉛を銀メッキしたものか、それともいぶしの銀か、読者にはそれがわかる。ひかえめに書いたものか、これみよが

しに誇張したものか、読者にはそれがわかる。読者が信じてよむものといえ、誇張のない謙虚なものであることにきまっている。

〔『記者の道』74ページ〕

近年、「広告のとれる雑誌」、「広告のとれるテレビ」がもてはやされ、「中身より見栄え」ばかりが重視される時代にあつて、『記者の道』に記された石川武美の「本気」が、私の胸底に突き刺さる。

★「来たれ、世の中をひっくり返したい人!!」

—小学館「受験者への100の挑戦」

もう15年も昔のことだが、マスコミ志望の3年生を対象に行った「夏季集中授業」のために、京都のビジネスホテルに投宿し、真夏の7日間（一日4コマ授業）、龍谷大学大宮キャンパスに通った。

数ある大手出版社のエントリーシートの中で、小学館の「2008年度定期採用応募要領」がいちばん際立っていた。課題作文のテーマは「大失敗」（740字以上800字以内。縦書き。自分の体験をもとに、具体的なエピソードを盛り込みながらお書きください）。学生たちにも「大失敗」の作文を宿題に出して、後日、発表、指導、添削を行った。



↑ 2008年度新卒採用のエントリーシート

表紙に「来たれ、世の中をひっくり返したい人!!」と大書されたエントリーシートの2・3ページ目に、「受験者への100の挑戦」が載っている。そのイントロ（前書き）には、こう書かれている。

出版社で働く人間に必要なものは何か？ 10

人の出版人がいれば、10通りの答えが存在するであろう命題だ。そんな十人十色な意見の中から、100をピックアップしてみた。さて、あなたにあてはまるのは？

この「100の挑戦」こそが、今回のメインテーマである〈エディターシップ（編集者魂）を考へるための、重要な「手がかり（hint）」である。

1. 集中力があるか
2. 忍耐力があるか
3. 強い好奇心があるか
4. ハングリーか
5. 「人と違うことをやりたい」という強い思いがあるか
6. 根性はあるか
7. プレッシャーを楽しめるか
8. 汚れ役を演じることも厭わないか
9. 叩かれても叩かれても屈しない覚悟はあるか
10. 答えがないかもしれない問題に挑戦できるか
11. 活字を貪るように読んでいるか
12. ベンチャー志向はあるか
13. 闘いを恐れないか
14. 回り道や寄り道をたくさんしてきたか
15. 自分の弱点を把握しているか
16. 我慢強い
17. 異世代の友人がいるか
18. 「余計なこと」が好きか
19. 出版の使命感・責任感を認識しているか
20. 正義感はあるか
21. 出すぎた杭になれるか
22. 大きな夢があるか
23. マメか
24. 創造的破壊者たりうるか
25. マネジメント能力があるか
26. さまざまな種類のアルバイトをしたか
27. 「石の上にも3年」という諺に共感できるか
28. 覇気があるか
29. 気分転換が上手か
30. 執念深い
31. 食わず嫌いではないか
32. 環境にすぐ順応できるか
33. 大局観があるか
34. 日々やりがいを感じているか
35. 見栄っ張りか
36. 自分のケツをきちんとふけるか
37. 本気人間か
38. 新しいことに挑戦するのが好きか
39. がむしゃらになれるか
40. 単純作業を厭わないか
41. ぬるま湯的体質は嫌いか
42. 寛容か
43. 往生際が悪い
44. 自分の主張を上手に伝えられるか
45. 寝なくても平気か
46. 几帳面か
47. 日々感動しているか
48. 計数に暗くない

か / 49. 自己中ではないか / 50. エリート意識は強くないか / 51. 人の意見に耳を傾けられるか / 52. 何でも面白がれるか / 53. 多少鈍感なところもあるか / 54. ココロは丈夫か / 55. 負けず嫌いか / 56. 「気合い」と「覚悟」があるか / 57. オンリーワンを目指したいか / 58. 絶対人にいえないような失敗をしたことがあるか / 59. 柔軟性があるか / 60. 権力からの圧力にも屈しないか / 61. 「前例は破るためにある」と思うか / 62. サービス精神が旺盛か / 63. 雑誌をたくさん買っているか / 64. とりあえず疑ってかかるか / 65. 敵を作ることを恐れないか / 66. 思慮深いか / 67. 矢面に立つのが苦手ではないか / 68. 臨機応変か / 69. 時間管理が上手か / 70. バイタリティーがあるか / 71. ユニークなアイデアの持ち主か / 72. 忙しいのが嫌いではないか / 73. 時間が厳守できるか / 74. コツコツと積み上げていく作業が嫌いではないか / 75. コンプレックスがあるか / 76. カラダは丈夫か / 77. 少々のリスクは恐れないか / 78. 嫌いなものでも認められるか / 79. いつでも（カラを含めて）元気でいられるか / 80. チームプレーが不得意ではないか / 81. 映画をたくさん観ているか / 82. 借りはきちんと返すか / 83. 感情が細やかか / 84. 首尾一貫しているか / 85. 野心があるか / 86. 温かいか / 87. 時代の風を察知できるか / 88. 多数の複雑な作業を併行して進めていくことができるか / 89. 楽観的か / 90. 粘り強く交渉することを厭わないか / 91. 視野が広く周囲への気配りも怠りないか / 92. 趣味がたくさんあるか / 93. 意欲的か / 94. 本をたくさん読んでいるか / 95. 大胆かつ繊細か / 96. 幫間体質（トコトン相手を持ち上げるサービス精神）があるか / 97. フットワークが軽いか / 98. 陽気か / 99. こういう時代だからこそ「チャンス」だと思うか

そして、表紙コピーと同じ100番目の質問と、それに続く「檄文（人びとを奮いたたせて、積極的な行動をとるように勧める文書）」が載っている。

100. 世の中をひっくり返したいか

私たちがもともとめているのは、
そんなあなたです。

あなたには、いくつ「ハイ」があっただろうか。もつとも、たくさん該当するから可、少ないから不可というつもりはないのだが。各問いかけに対して、自身の体験から具体的なエピソードを思い起こすことができるだろうか？自分に当てはまらない項目に対して、積極的にアプローチしていく姿勢をもてるだろうか？「こんなに多くのことを求められるのか」と退くのではなく、「よーし、だったら挑戦してやろうじゃないか」と前向きになれるだろうか？

（2008年度 小学館エントリーシート）

「鯛（魚）は頭から腐る（Fish rots from the head down）」という。今回の「中居正広・フジテレビ騒動」を引き起こした経営トップの責任は、もちろん重大である。しかし、かつて「楽しくなければテレビじゃない」をスローガンに視聴率三冠王（全日、プライム、ゴールデンタイムの時間帯で、平均視聴率トップ）を達成し、タレントや芸能関係者の接待に明け暮れた、フジテレビの悪しき「風土（corporate culture）」を作った経営陣を刷新するだけでは、何の解決にもならない。

いま早急にとり組むべき最優先課題は、フジテレビが失った「感動する魂」、〈エディターシップ〉をとり戻すことだ。よい「モノ（番組）」をつくる「ヒト（制作者）」が求められる。そして「感動する魂」をもつ「ヒト（新人）」を育てるためには、いま、彼らを指導する立場の「ヒト（先輩）」自身が、その〈エディターシップ〉を問われている。

同じように、「真実を書いているか」「情熱で書いているか」「材料豊富で書いているか」「祈りの心で書いているか」と問う石川武美の〈エディターシップ〉、清新な「感動する魂」が、いまま「生涯一記者」をめざす、この私に向かって語りかけてくる。